HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第二言語習得における日本語と韓国語の目的語を標示する格の学習困難度の研究 ： 有標性と他動性によるアプローチ［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	村山, 友里枝
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第13980号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78334
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Yurie_Murayama_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）　　氏名：村山　友里枝

学位論文題名

第二言語習得における日本語と韓国語の目的語を標示する格の学習困難度の研究
―有標性と他動性によるアプローチ―

本研究の目的は、第二言語習得における日本語と韓国語の目的語の格標識(対格と与格)の学習困難度について「有標性(Markedness)」と「他動性(Transitivity)」に基づく2つの仮説を提案し、その予測を学習者コーパスの分析に基づいて検証することによって、有標性と他動性が格標識の学習困難度にどのような影響を与えているか明らかにすることである。

まず、第1章では、本研究の理論的背景と論文の構成を説明した。

第2章では、学習困難度の研究に有標性が用いられるようになった経緯を、対照分析仮説(Contrastive Analysis Hypothesis, CAH)、有標性差異仮説(Markedness Differential Hypothesis, MDH)、中間言語と構造的一致の仮説(Structural Conformity Hypothesis, SCH)の3つの時期に分けて説明した。そして、有標性に基づく研究は、対象領域が音韻論に偏っていること、目標言語を英語とするものがほとんどであること、有標性の概念が曖昧であることの3つの問題があることを論じた。さらに、Haspelmath(2006)に従って、「類型論的有標性」の問題点を説明し、代わりにCroft(2003)の「頻度に基づく有標性」を採用することを提案した。

第3章では、日本語と韓国語の格について概観し、日本語の二項動詞の目的語の格標示の統語的性質を明らかにした。特にSadakane & Koizumi(1995)の統語的なテストに基づいて、日本語の与格/後置詞「に」と韓国語の対格「을/를[ul/lul]」との対応関係を明確にした。その上で、日本語と韓国語の目的語の格標識の頻度を、世宗韓日パラレルコーパスを用いて調査し、目的語を対格で標示する韓国語の用法よりも目的語を与格/後置詞で標示する日本語の方が有標であることを示した。この結果に基づいて、より無標な構造の習得が易しいことを予測するEckman(1991)の構造的一致の仮説は、韓国人日本語学習者にとっての日本語の二項動詞の格標示の学習困難度を次のように予測することを示した。(a) 対格「を」と対格「을/를[ul/lul]」が対応する場合、どちらも無標なので対格「を」の学習は易しい。(b) 与格の格標識「に」と対格「을/를[ul/lul]」が対応する場合、より有標な「に」の学習は難しい。(c) 後置詞「に」と対格「을/를[ul/lul]」が対応する場合、より有標な「に」の学習は難しい。

第4章では、韓国人日本語学習者のコーパスを用いて、上の3つの予測の中、(a)、(b)を韓国人日本語学習者のコーパス(「タグ付きKYコーパス」および「C-JAS(Corpus of Japanese As a Second language)」)の正用と誤用と出現時期の分析に基づいて検証した。その結果、(a)の対格「を」の正用は、学習の初期の段階から発話され、習得が易しいことが示唆された。次に、対格「を」の誤用は、中級、上級の学習者でも「バスを乗る」、「友達を会う」のような発話が見られ、(b)の与格「に」の習得が難しいことが示唆された。さらに、誤用が見られた「乗る」と「会う」について縦断的なコーパスであるC-JAS（韓国

語母語話者3名の3年間の発話が学習開始から3〜4ヵ月ごとに1回の割合で収集されている）で誤用も含めた習得の過程について分析した。その結果、「〜に乗る」の形の正用は最も遅い8期に1例のみ見られ、「〜に会う」の形の正用は、4期から7期に見られ、習得が難しいことが示唆された。一方、「〜を乗る」、「〜を会う」の形の誤用の数は多くはなかった。しかし、「バスφ乗る」、「友達φ会う」のような格標識の脱落の割合は、「乗る」で66.7%、「会う」で29%と高く、意図的に回避したとも考えられた。そこで、格標識の脱落が格標識の回避の現象かどうか明らかにするため、同じ話者が他の他動詞（「読む」）の場合に対格「を」を用いているかどうか調査し、格標識脱落が回避の結果である可能性が高いことを示した。さらに、『BTSJによる日本語話し言葉コーパス(2011年版)』を用いて、日本語母語話者の発話との比較も行った。その結果、日本語母語話者の格標識の脱落の割合は、「φ乗る」は韓国人日本語学習者の約半分程度、「φ会う」は半分以下の割合であることが分かった。この結果は、韓国人日本語学習者の格脱落が回避であることを強く示唆しており、予測(b)が経験的に正しいことが示唆された。次に、日本人韓国語学習者についても、この仮説の予測を日本人韓国語学習者のコーパス（「KC Corpus」）の分析に基づいて検証した。その結果、同様に予測が経験的に裏付けられることが示唆された。最後に、格の学習困難度には様々な要因が関わっており、有標性の仮説だけでは十分に説明できないことを論じた。

第5章では、格の学習困難度に影響を与えていると考えられる「他動性」に基づく仮説を説明した。「他動性」に関するHopper and Thompson(1980)、角田(1991/2009)などの先行研究を説明した後で、他動性を用いた日本語の格の学習困難度についての蘇(2007)などの先行研究を概観し、これらの研究では他動性の基準が曖昧であるという問題を指摘した。その上で、「他動性」に「動詞の頻度」を加えた基準に基づく次の様な学習困難度の仮説を提案した。i）二項動詞を含む文の他動性と動詞の頻度の2つの要因によって(a)-(d)の4つの類に分類される。(a) 他動性：高、頻度：高 (b) 他動性：高、頻度：低 (c) 他動性：低、頻度：高、(d) 他動性：低、頻度：低；ii）動詞の学習困難度はこの範疇ごとに異なる。

第6章では、上の仮説は、学習困難度は(a)が最も低く、(d)が最も高く、(b)、(c)の学習困難度は他動性と動詞の頻度のどちらの影響が大きいかによるという予測をすることを明らかにした上で、韓国人日本語学習者のコーパス（「C-JAS」）の分析による検証を行った。その結果、対格「を」を取る動詞は、(a)「他動性：高、頻度：高」の類から発話される傾向があり、この類の動詞は予測通り習得が易しいことが示唆された。一方、(b)、(c)の類の動詞の発話の時期については明確な傾向が見られなかった。また、学習の比較的初期の段階でも、(d)「他動性：低、頻度：低」の類に属する「勉強する」などの動詞は正しく発話できていることが分かった。この結果は、他動性と動詞の頻度という要因以外の要因(馴染み度など)があることを示唆している。

第7章では、Haspelmath(2015)の「他動性卓越(transitivity prominence)」の概念について紹介し、この枠組みを用いることによって、3章で論じた有標性を他動性の特徴の一部として形態的な他動性と統合することが出来ることを論じた。最後に、パイロット的な試みとして「他動性卓越」と意味的特性としての「他動性」に基づく学習困難度の仮説を提案し、コーパスデータを用いて検証を行い、その問題点を指摘した。

第8章はまとめと今後の課題である。